

PROFILE

満田 憲昭

愛媛大学大学院医学系研究科・
統合生体情報学講座生理学分野

平成17年7月より、愛媛大学医学部生理学第二教室（現：大学院医学系研究科・統合生体情報学講座生理学分野）を担当しております。また、翌4月より愛媛大学総合科学研究支援センターの副センター長を併任しております。名前こそ副センター長ですが、その内容は機器分析センター長・動物実験施設長・RI実験施設長を兼務した職で、膨大な雑務に追われています。

平成18年4月に愛媛大学医学部が大学院大学となった折りに、当教室の講座名は統合生体情報学に変わりましたが、先代の前田信治先生と相談し、なんとか分野名として生理学の名前を残しました。同時に、人体機能学という名称だった医学部での講義科目名も人体生理学に変更しました。時代の趨勢に逆行しているようですが、どうしても「生理学」の名称へのこだわりが捨て切れなかった故の決断でした。

ただ、私と生理学とのつきあいはあまり長くはありません。私は医学部を卒業してすぐに大阪大学老年病医学講座（荻原俊男教授）に入局しました。そこで老人科の診療に携わる一方、折しもヒトゲノムプロジェクトの立ち上げの時期でしたので、第8染色体のゲノム解析および早老症ウェルナー症候群の遺伝子解析を3年間の研究テーマとしました。その後留学を境に、テーマを「アルツハイマー病の発症原因の解明」に変更し、日本に帰国後は解剖学教室に所属して同研究を継続しました。平成12年に愛媛大学医学部生理学第二教室に助教授として赴任し、この時にはじめて生理学教室に身を置くこととなりました。研究テーマも広げ、「神経細胞死のメカニズムの解明」としまし

た。当時、前田教授は血液の微小循環を専門としておられましたので、今にしてみれば、全くの異分野に興味を持つ私を助教授として採用された時は大変なご決断だったのではないかと思います。

教授に昇任した今でも、神経科学の研究を推進する一方で、前田先生の血液の微小循環に関する研究も引き継がせていただいています。相異なる二つの分野を同時並行することは研究効率上不利であると思われがちですが、実際にやってみるとお互いに得る物が多いようです。ちょっとした異質的な雰囲気となっています。異なる技術がおもしろいほど相互乗り入れしています。「そもそも生理学というものは、それ自体がハイブリッドなのだなあ。」と感心したりもしています。

愛媛大学医学部の卒業生のうち、基礎医学を志してくれる人はほんのひと握りに過ぎません。追い打ちをかけるように、二年前に二年間の臨床研



写真
「セミナー室にて教室員と。右端が満田」

修が義務付けられました。それから二年経った今、臨床医学・基礎医学を含めた本大学院医学系研究科への次年度の入学希望者は半数近くに減ってしまいました。若い研究者を育てることが大学の使命であるとしたら、今の状態は危機的であると言わざるを得ません。私自身の臨床経験が長かったこともあり、私は決して卒後すぐに基礎医学教室に身を置くことを是とはしません。むしろ生理学という科目の性格上、臨床医学の経験者は大歓迎です。将来的にその何人かが基礎医学を志向して戻ってきてくれるのを祈るばかりです。そのときに備えて、じっくりと魅力的な研究を続けていかねばならないと覚悟しています。

略歴

- 1990年 大阪大学医学部 卒業
- 1990年 同 附属病院 医員（研修医）
- 1991年 友誼会総合病院 内科医師
- 1993年 大阪大学医学部研究生（老年病医学）
- 1995年 アメリカ・デューク大学医療センター
リサーチアソシエイト
- 1999年 大阪大学大学院医学系研究科 助手（機能形態学）
- 2000年 愛媛大学医学部 助教授（生理学第二）
- 2005年 同 教授（生理学第二）